

# 王維の文人画世界の痕跡

## ——漱石の題画詩を例として——

范 淑文

(台湾大学日本語文学科 副教授)

### (一) はじめに

「日本学は誰のものか」と問われた際、話者か聞き手のどちらかに日本以外の国の人、つまり、その場には日本人のみではないという前提の下での質問と考えてよからう。なぜなら、もし話者も聞き手も日本人であれば、国語学、国文学などのような名称で互いに十分に通じ合う筈であり、ことさら「日本」という表現に改める必要がないからである。つまり、「日本」とは外国を意識したものであり、更には日本発信型の内外的な捉え方ではなく、外国発信型に重きを置いた捉えかたと言えよう。そこで、冒頭の「日本学は誰のものか」を再度考えてみよう。すると、外国人研究者なら、日本からの視点に立脚するのではなく、自国の視点から研究題材である日本文学や日本語学または日本文化に当たり考察していくことも可能となる。つまり、外国発信型に立脚すれば、その国の人にしか見えない部分が浮かび上がり、その国の研究者にしか出来ない提言により日本学に新たな一石を投じることが出来、外国人研究者と日本学との新たなコラボレーションが生まれるのではないだろうか。

具体的に例を挙げて言えば、例えば漱石の芸術や文学創作における中国の文人王維の投影や王維の受容といった、従来の漱石文学の視点からの研究より、「王維文学や王維芸術の痕跡」のように視座を変えた座標軸こそが、外国人日本学研究者の背負う責任ではなかろうか。すなわち、これまで客体とされていた日本と比較する際の対象となる外国の素材を主であるシチュエーションに切り替え、それらを扱おうという提案である。こうした逆の研究姿勢に基づき、王維の世界、王維文人画の世界が漱石にどれほど継承されたのか、または継承されなかったのは如何なる部分であろうか、などの点に焦点を据えて考察していけば、従来の研究方向で見落とされていた部分が浮かび上がることは可能になるだろうという期待から生み出した発想である。

漱石が王維を頻りに湛え、王維の文人的生涯に傾倒していたことは<sup>1</sup>、漱石の文学

---

<sup>1</sup>漱石の王維への憧憬といえば、『草枕』の第一章で、「うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。(中略) 独坐幽篁裏、弹琴復長嘯、深林人不知、明月来相照。只二十字のうち

作品や友人への書簡などからその一端が伺える。厩大な漢詩を残し、アマチュア画家でもある点で、漱石と王維は共通している。文人画の始祖と称せられている王維の芸術は「詩中に画あり、画中に詩あり」<sup>2</sup>と最高の境地に達していることは改めて言うまでもなからうが、一方、漱石も晩年に南画（文人画）<sup>3</sup>を画いたり、のち画に添える積りで題画詩を沢山詠んだりしている。その題画詩には春を詠嘆した作品が少なくない。では、同じく春をモチーフにした王維の漢詩一絵のような漢詩一は王維のファンである漱石の漢詩の中にはその痕跡がどれ程残っているだろうか、と言う問題に深く興味を感じる。よって、王維の春に因んだ漢詩にどんな表現が春のシンボル

---

に優に別乾坤を建立して居る。」（『漱石全集 第三巻』P10）と、陶淵明や王維の詩を、主人公である画工が思い浮かび、それは即ち世俗を離れようとする時に構えるべき姿だと語り手が示唆している一節が挙げられる。それ以外に、漱石の俳句集に収められている 2418 の俳句「門鎖ぞす王維の庵や尽くる春」（『漱石全集 第十七巻』）（王維の詩「張五弟に答う」には、「終年客無く長く関を閉ざし、終日心無くして長く自ら間なり」という句がある。）に王維の名が触れられ、王維の漢詩に倣っていると思われる表現も見られる。また「篆字の義は別段よきも？の無之王維の日落江湖白潮来天地青杯如何かと存候然し十字にて足らぬならば是非なく候。石蘭斜点筆桐葉坐題詩もよろしかるべくか。」と、明治四十年三月二十七日付けの橋口五葉宛（『漱石全集 第二十三巻』P36）の書簡にも王維の漢詩が引用されている。そして、「(七)曠然荘 王維の詩に曠然蕩心目とあります。(八)如一山荘 是も王摩詰の句です雲水空如一とあるのです。」（『漱石全集 第二十四巻』P417）とのように、大正四年四月二十九日付け加賀正太郎宛の書簡には、山荘の命名の相談を受け、漱石が考え出した十四個の名称のうち王維の詩に因んだものが二つ入っている。以上のことから、漱石が王維を慕っていた一端が伺えるだろう。

<sup>2</sup>明治時代の美術評論家である瀧精一は「史伝の依れば、晋宋の畫に傳神を唱へ、若くは氣韻を論ずるもの起り、(中略)就中王維は蘇東坡に依りて、詩中畫あり、畫中詩ありと評せられ。」（瀧精一「支那畫に於ける山水一格の成立」『國華』 No. 191 明治四十年四月）と、述べている。また、もう一人の美術評論家である田中豊蔵も「蘇東坡も「摩詰の詩を味ふに、詩中に画あり、摩詰の画を觀るに、画中に詩あり」といつて居る。(中略)必ずしも雲の白衣蒼狗と變化するを喜ぶのではなくてたゞ雲を看ては之に遠遊の情を寓する。」（田中豊蔵「南画新論」(二)『國華』No. 264 大正一年五月）と語り、瀧精一とほぼ同じ見解を示している。それは恐らく「文人畫自王右丞始。其後董源僧巨然李成范寬為嫡子李龍眠王晉卿米南宮及虎兒。皆從董巨得來。直至元四大家。」（董其昌「畫禪室隨筆卷二」 「畫訣」『畫禪室隨筆』1968.6 廣文書局有限公司 P52）という、文人画に関する董其昌の記述に基づいたものであろう。

<sup>3</sup>范淑文「漱石の南画にみるその隱逸精神—陶淵明の受容—」（『関西大学東西学術研究叢刊 32 東アジアの文人世界と野呂介石—中国・台湾・韓国・日本とポーランドからの考察—』中谷伸生編著 2009.3.31 関西大学出版部 P61-71）を参照されたい。

として使われているか、そうした表現が漱石の題画詩の中にどれ程再生しているか、そして共通していない部分などの点を考察していくのが本発表の主旨である。

## (二) 王維の詩にみる春のイメージ

王維の漢詩の題材と言えば、友人との別れ<sup>4</sup>や、田園風景<sup>5</sup>の他に、また春を歌う作品も注目に値するだろう。吳啟楨氏が指摘した通りに、王維の春を歌う詩は風景描写にとどまらず、風景描写を通して別れや恋しさなどの心境を訴える叙情的な漢詩<sup>6</sup>も少なくない<sup>7</sup>。小論では王維の春を詠んでいる漢詩に絞って、春のイメージと考えられる表現、春という季節に生じた心境、または春に寄せられた寓意などを考察していきたい。紙幅の制限、または考察の便宜を図り、長詩の場合は春に関連の部分のみを表一に掲げておく。

表一<sup>8</sup>

屋上春鳩鳴。村邊杏花白。持斧伐遠揚。荷鋤覘泉脈。歸燕識故巢。舊人看新曆。臨觴

<sup>4</sup>例えば、「送元二使安西」---「渭城朝雨裊輕塵。客舍青青柳色新。勸君更盡一杯酒。西出陽關無故人」また「送別」---「下馬飲君酒。問君何之所。君言不得意。歸臥南山陲。但去莫復問。白雲無盡時」など、友人を見送る場面やその心境を詠んだ詩が挙げられる。([唐]王維著[清]趙殿成 箋注『王右丞集箋注』1998.3 上海古籍出版社 及び小林太市郎・原田憲雄『漢詩大系 第十卷』1964.8.30 株式会社集英社 との二冊を参照。)

<sup>5</sup>例えば、「渭川田家」---「斜光照墟落。窮巷牛羊歸。野老念牧童。倚杖候荆扉。雉雊麥苗秀。蠶眠桑葉稀。田夫荷鋤立。相見語依依。即此羨閒逸。悵然歌式微」や、「春中田園作」---「屋上春鳩鳴。村邊杏花白。持斧伐遠揚。荷鋤覘泉脈。歸燕識故巢。舊人看新曆。臨觴忽不御。惆悵遠行客」、または「田園樂七首」など、有名な漢詩が挙げられる。([唐]王維著[清]趙殿成 箋注『王右丞集箋注』1998.3 上海古籍出版社を参照。)

<sup>6</sup>「以王維詩而言，對於「春」的山川景色善用各種意象的描述，讓詩作充滿氛圍，更讓詩作形成如詩如畫，是真實場境卻又如詩似幻，(中略)而在「春」天的情境中也有「愁」的心境，如「愁見遙空百丈絲，春風挽斷更傷離」、「若道春風不解意，何因吹送落花來?」、「不學御溝上，春風傷別離」、「花心愁欲斷，春色豈知心」，其中有對景的傷情，有相思、有離愁，都可借用「春」的景象，如「綠波」、「春風」、「落花」等來抒發情意。」(吳啟楨 著『儒林選萃 38 王維詩的意象』2008.05 文津出版社有限公司 P229)

<sup>7</sup>例えば、「晚春閨思」---「新妝可憐色。落日卷羅帷。鑪氣清珍蕈。牆陰上玉墀。春蟲飛網戶。暮雀隱花枝。向晚多愁思。閒窗桃李時。」というのがその類の詩であろう。

<sup>8</sup>表一に掲げている漢詩の表記は『王右丞集箋注』(王維著[清]趙殿成 箋注 1998.3 上海古籍出版社)に基づいている。

忽不御。惆悵遠行客。 -- (春中田園作)

草木花葉生。相與命為春。當非草木意。…**鳳凰**飛且鳴。容裔下天津。清淨無言語。茲焉庶可親。 -- (南飛鳥)

日暮登春山。山鮮雲復輕。遠近看春色。躊躇新月明。仙人浮邱公。對月時吹笙。**丹鳥**飛熠熠。蒼蠅亂營營。群動汨吾真。訛言傷我情。安得如子晉。與之游太清。 -- (無題)

**漁舟**逐水愛春山。兩岸**桃花**夾去津。坐看**紅樹**不知遠。行近**青溪**不見人……近入千家散花竹。 ----- (桃源行)

宿雨乘輕屐。春寒著弊袍。開畦分白水。**間柳**發**紅桃**。草際成棋局。林端舉**桔槔**。還持鹿皮几。日暮隱蓬蒿。 ----- (春園即事)

好讀高僧傳。時看辟穀方。鳩形將刻杖。龜殼用支牀。**柳色**春山映。**梨花****夕鳥**藏。北窗**桃李**下。**閑坐**但焚香。 ----- (春日上方即事)

新妝可憐色。落日卷羅帷。鑪氣清**珍葦**。牆陰上玉墀。**春蟲**飛網戶。**暮雀**隱**花枝**。向晚多愁思。**閒窗**桃李時。 ----- (晚春閨思)

**春樹**繞宮牆。**春鶯**轉曙光。欲**驚啼**暫斷。移處弄還長。隱葉棲承露。**攀花**出未央。游人未應返。為此**思故鄉**。 ----- (聽宮鶯)

不到東山向一年。歸來纔及種**春田**。雨中**草色**綠堪染。水上**桃花**紅欲然。優婁比邱經論學。傴僂丈人鄉里賢。披衣倒屣且相見。**相歡語**笑衡門前。 ----- (輞川別業)

上蘭門外**草萋萋**。未央宮中**花裏栖**。亦有相隨過御苑。不知若箇向金隄。入春解作千般語。拂曙能先**百鳥啼**。萬戶千門應覺曉。建章何必**聽鳴雞**。 ----- (聽百舌鳥)

人間**桂花**落。夜靜**春山**空。月出驚**山鳥**。**時鳴****春澗**中。 ----- (鳥鳴澗)

**春池**深且廣。會待**輕舟**迴。靡靡**綠萍**合。**垂楊**掃復開。 ----- (萍池)

結實紅且綠。復如**花更開**。山中倘留客。置此**茱萸**杯。(「茱萸泝」 -- 『輞川集』)  
木末**芙蓉**花。山中發**紅蓼**。**澗戶**寂無人。紛紛**開且落**。(「辛夷塢」 -- 『輞川集』)

**綠艷**閒且靜。**紅衣**淺復深。**花心**愁欲斷。**春色**豈知心。 ----- (紅牡丹)

君自故郷來。應知故郷事。來日綺牕前。寒梅著花未。  
已見寒梅發。復聞啼鳥聲。愁心視春草。畏向玉階生。-----（雜詩）

採菱渡頭風急。策杖村西日斜。杏樹壇邊漁父。桃花源裡人家。----（「田園樂」其三）  
萋萋芳草春綠。落落長松夏寒。牛羊自歸村巷。童稚不識衣冠。----（「田園樂」其四）  
桃紅復含宿雨。柳綠更帶春烟。花落家僮未掃。鶯啼山客猶眠。----（「田園樂」其六）

愁見遙空百丈絲。春風挽斷更傷離。閒花落遍青苔地。盡日無人誰得知。--（閨人春思）

上記の春に因んだ漢詩に織り込まれている春と思われる表現を植物などの風景、鳥などの動物、人間の心境との三つの部類に分けて考察してみる。

### (1)植物などの風景

|                      |       |              |
|----------------------|-------|--------------|
| 「花葉」「草木」             | ----- | （南飛鳥）        |
| 「春山」「桃花」「紅樹」「青溪」「花竹」 | ----- | （桃源行）        |
| 「間柳」「紅桃」「桔槔」         | ----- | （春園即事）       |
| 「柳色」「春山」「梨花」「桃李」     | ----- | （春日上方即事）     |
| 「珍蕈」「花枝」「桃李」         | ----- | （晚春閨思）       |
| 「春樹」「攀花」             | ----- | （聽宮鶯）        |
| 「春田」「草色綠」「桃花紅」       | ----- | （輞川別業）       |
| 「草萋萋」「花裏栖」           | ----- | （聽百舌鳥）       |
| 「桂花落」「春山空」「春澗」       | ----- | （鳥鳴磻）        |
| 「春池」「綠萍」「垂楊」         | ----- | （萍池）         |
| 「紅且綠」「花更開」「茱萸」       | ----- | （「茱萸泝」『輞川集』） |
| 「芙蓉」「紅萼」             | ----- | （「辛夷塢」『輞川集』） |
| 「綠艷」「紅衣」「花心」         | ----- | （紅牡丹）        |
| 「寒梅」「春草」             | ----- | （雜詩）         |
| 「採菱」「杏樹」「桃花源」        | ----- | （「田園樂」其三）    |
| 「萋萋」「芳草」「春綠」         | ----- | （「田園樂」其四）    |
| 「桃紅」「柳綠」「花落」         | ----- | （「田園樂」其六）    |
| 「閒花」                 | ----- | （閨人春思）       |

このように、

(A) — 「花葉」「草木」「紅樹」「春樹」「攀花」「草色綠」「草萋萋」とあるように、冬眠を終えて再び生き返ったような象徴として木や花、草など普遍的な植物が多用されている。その普遍性に対応するように生命力の象徴として緑が伴われ、また花が艶やかに咲いている雰囲気醸し出すように赤（紅）という色も春のシンボルとして使われている。緑と赤（紅）との色彩によって、春が鮮やかになり、全てのものが明る

くていきいきと見え、人気のない寒村でも賑やかになってくるのである。

(B) —「桃花」「花竹」「採菱」「間柳」「桔槔」「梨花」「桃李」「珍蕈」「桂花落」「春澗」「春池」「綠萍」「茱萸」「芙蓉」「寒梅」「杏樹」とあるように、(A) の項目にある普遍的な草花とは異なり、王維はまた具体的な花や植物の名をも春の詩に沢山盛り込んでいる。春の訪れに誘発されたようにそれぞれの植物が芽生え、花が咲き、または実ったりするなどの表現から、大地からの恵みへの詩人の感激や詠嘆が感じ取れる。梅、桃、杏、桂または竹、柳などよく知られている花などの植物の他、芙蓉や梨花のようなそれほど見慣れない花も織り込まれ、更に菱や、蕈（きのこ）、茱萸、桔槔など珍しい食材も春の植物として取り入れられている。こうした観賞用及び実用的な植物の表現によって、その地方性が強調されるとともに、その村の豊かさも謳歌されているとも捉えられるだろう。

柳は春の象徴のほか、例えば、王維の「送元二使安西」——「渭城朝雨裊輕塵。客舍青青柳色新。勸君更盡一杯酒。西出陽關無故人」という詩にあるように、春風に靡いている柳枝は別れる時の辛さの隠喩としてもよく使われている<sup>9</sup>。それ以外の植物については、都である長安から少し離れた、風景のよい郊外に住居を構えていた王維は、きわめて写実的な姿勢を構えて、眼に映ったものをありのままに詠っていたと思える。そうした手法からもたらした効果であろうか、「詩中に画あり、画中に詩あり」と称された通りに、上掲した王維の春に因んだ詩も、絵画的なものが多い。「君自故郷來。應知故郷事。云々」——（雑詩）という詩が極めて絵画的だと、貝塚茂樹氏が見なしている<sup>10</sup>が、「桃紅復含宿雨。柳綠更帶春烟。花落家僮未掃。鶯啼山客猶眠。」——（「田園樂」其六）を始め<sup>11</sup>田園風景を詠んだ「田園樂」という一連の詩はその絵画の

---

<sup>9</sup>吳啟楨氏は、従来の説に従いながら、柳の枝の象徴について次のように語っている。「再則柳の支條垂降，隨著春風飄搖，勾起了送別與相思的萬千愁緒，也引發了詩人吟興無窮。因此古人於離別時，常折柳贈別，而古代文學作品也一再出現柳樹，以表達依依離情。」（また、風に靡かされている柳の枝は、別れる時の悲しい気持ちを惹き起こし、詩を詠む気持ちが誘われるゆえ、昔別れる時に柳の枝を折って相手に贈る習慣がよくあり、古典文学の中にも柳で別れづらい気持ちとする表現もしばしば現われている。）吳啟楨 著『儒林選萃 38 王維詩的意象』2008.05 文津出版社有限公司 P223)

<sup>10</sup>貝塚茂樹氏は「雑詩とあるが商用のため旅先きにある夫と、旅先きの夫を思う妻の感情を三首の詩にしている「閨怨」を歌った詩とされている。（中略）第三景は故郷の窓辺で満開の梅を前にして、旅先きの夫に思を馳せる妻をえがく。この三景がそっくり一巻の絵となるではないか。」と、この詩の絵画性を語っている。（貝塚茂樹「詩中に画あり」『文人畫粹編 第一卷 王維』1975.5 中央公論社 P117.118)

<sup>11</sup>王維の「田園樂七首其六」について、『漢詩大系 第十卷』には、「誰も近づかぬ山の中で、鶯はなまめかしく啼き、山客は日の高くなるまで、誰に気がねもなくねむるのである。酌酒抱

趣が「君自故郷來。應知故郷事。云々」— (雑詩) に負けないほど著しいものといえよう。——鮮やかに咲いている桃の花が雨に濡れているのはなんともいえない風情が帯びており、雨の後の柳は更に青々しく見え、こうした美しい朝に、鶯の囀りにも一向気にせず、泊まっている客が心地よく眠りを貪っており、お使いのものも庭を掃除することを怠っている、——目の前に太平極まりの山村の画が広げられている様子である。

## (2) 鳥など動物の関連表現

|            |       |           |
|------------|-------|-----------|
| 「鳩鳴」「歸燕」   | ----- | (春中田園作)、  |
| 「鳳凰」       | ----- | (南飛鳥)     |
| 「丹鳥」       | ----- | (無題)      |
| 「夕鳥藏」      | ----- | (春日上方即事)  |
| 「春蟲」「暮雀」   | ----- | (晚春閨思)    |
| 「春鶯囀」「鶯啼」  | ----- | (聽宮鶯)     |
| 「百鳥啼」「聽鳴雞」 | ----- | (聽百舌鳥)    |
| 「驚山鳥」「時鳴」  | ----- | (鳥鳴磻)     |
| 「啼鳥聲」      | ----- | (雑詩)      |
| 「牛羊」       | ----- | (「田園樂」其四) |
| 「鶯啼」       | ----- | (「田園樂」其六) |

すでに吳啟楨氏に指摘されたとおりに<sup>12</sup>、これらの王維の春を詠嘆する詩に登場する動物のうち、鳥の登場回数をもっとも多いことは明らかであろう。牛や羊に比べ、鳥は登場回数が多いのみならず、鳩や燕、鳳凰、雀、鶯など具体的な鳥の名を挙げ、更に「囀り」、「啼く」、「驚く」など、鳥の動きにまでスポットを当てている。鳥の種

---

琴もまたさしむかいでさしつさされつ、琴瑟相和するさまをうたうのだ。それはとにかく王維にとってはじつに長い間のぞんで来た理想の生活が、現実のものとしてこの地上に、あらわれたのだった。」(小林太市郎+原田憲雄『漢詩大系 第十卷』株式会社集英社 1964. 8. 30 P195) と、その写実性を語っている。そして、范慶雯氏は「上聯「桃紅復含宿雨，柳綠更帶春煙。」描寫景色的優美；下聯「花落家僮未掃，鶯啼山客猶眠。」則描寫山居的閒逸。紅色的桃花，沾濡著一滴滴隔夜的雨珠，綠色的楊柳籠罩在春日氤氳的山嵐中」(『中國古典文學賞析精選 寒山秋水』 范慶雯 選註 1984. 10. 25 初版 1985. 3. 10 二版 時報文化出版事業股份有限公司 P241) と、一幅の絵を眺めているようにその詩を解いている。

<sup>12</sup>吳啟楨氏は「王維詠春詩中的動物以泛稱的「鳥」出現的次數最多，而當中又以鳥聲、鳥啼為冠，可見鳥在詩中以動態的「啼」及「聲」為主。在春天萬物勃發的時節，鳥的意象是充滿著新生與活力的。」と述べている。(吳啟楨 著『儒林選萃 38 王維詩的意象』儒林選萃 2008. 05 文津出版社有限公司 P213)

類の多いことは、恐らく王維が住居を構えていた山里は鳥にとっても棲みやすく、桃源郷のようなところであることを物語っているのであろう。蘇一心氏は、こうした鳥の囀りや啼き声などの表現によって、王維の春を歌う漢詩は絵画的効果のほか、音楽性<sup>13</sup>も楽しめるという指摘している。その音楽的な効果という説にも賛同するが、「百鳥」一さまざまな種類の鳥が元気になって、このめでたい春を謳歌するように、時には大きな声で鳴いたり、時には友達と会話しているように囀ったりするような表現によって、春の明るさ、わくわくとする躍動感に溢れた春の雰囲気を読者が満喫することができるのである。つまり、鳥の啼き、囀り、または驚きなどの表現<sup>14</sup>を通して、王維の春を謳歌する漢詩は平面な絵画にとどまらず、動画のように画面の動物は動いている様子はありありと見せているのである。

鳥のほか、牛や羊も王維の春を詠嘆する漢詩に登場している。例えば、「田園樂」其四「萋萋芳草春緑。落落長松夏寒。牛羊自歸村巷。童稚不識衣冠。」一には春に青々しい草原で美味しい草を思う存分に食べて帰ってきた羊や、一日の田んぼ仕事を終えて村に戻ってきた牛、更に遊んでいる子供たちを加え、豊かでのんびりとした桃源郷の再現ではないだろうか。

### (3) 人間の心境

|                |       |          |
|----------------|-------|----------|
| 「臨觴」「惆悵」       | ----- | (春中田園作)  |
| 「吹笙」「傷我情」      | ----- | (無題)     |
| 「漁舟」           | ----- | (桃源行)    |
| 「閑坐但焚香」        | ----- | (春日上方即事) |
| 「可憐色」「愁思」「閒窗」  | ----- | (晚春閨思)   |
| 「思故郷」          | ----- | (聽宮鶯)    |
| 「相歡語笑」         | ----- | (輞川別業)   |
| 「人間桂花落」「夜靜春山空」 | ----- | (鳥鳴磻)    |

---

<sup>13</sup>蘇一心氏は「詩中有畫，畫中有詩。」還不足以描摹清楚王維的詩畫美學，應該再補充：「詩中有樂，畫中有樂。」方才至矣盡矣。」と、王維の漢詩は絵画的のみならず、読者に音楽も伝わるような効果も持っているという賞賛している。(蘇一心 著『王維山水詩畫美學研究』文史哲學集成 2007.05 文史哲出版社 P178)

<sup>14</sup>「(聽宮鶯)中「春樹繞宮牆，春鶯囀曙光」，「鶯」的鳴叫聲如撥弄是非的言語，諷刺在皇帝面前花言巧語、討取歡心的弄臣，「欲驚啼暫斷，移處弄還長」，既無法使它斷絕；「游人未應返，為此思故郷」，因此，詩人不得在暮春鶯啼之時，興起思歸故郷的情懷。」(吳啟楨 著『儒林選萃 38 王維詩的意象』2008.05 文津出版社有限公司 P216))とあるように、皇帝に媚びたり、ライバルと想定する人の讒言を皇帝の前で告げたりする人の行動の暗喩として鶯の鳴き声が使われている、という捉え方もある。



「輕舟」----- (萍池)  
「澗戸寂無人」----- (「辛夷塢」-- 輞川集)  
「閒且靜」「花心愁欲斷」「春色豈知心」----- (紅牡丹)  
「愁心」----- (雜詩)  
「漁父」----- (「田園樂」其三)  
「童稚不識衣冠」----- (「田園樂」其四)  
「鶯啼山客猶眠」----- (「田園樂」其六)  
「愁見」「春風挽斷更傷離」「盡日無人誰得知」-- (閨人春思)

第一、二節の考察で、王維の春に因んだ詩は生命力に溢れており、明るくて桃源郷のような雰囲気の季節として春が看做されている詩が多かったことは明らかであろう。とというものの、こうした春に向かって、詩人や登場人物の気持ちは常に嬉しく居られるとは限らない。それについて、吳啟楨氏及び蘇心一氏は次のようにそれぞれの見解を示している。

(ア) 詩人對於「春」的多情，有喜、有樂、有憂、有悲，處處顯現出詩人的多愁善感情懷，一花一木，一草一石，都能讓作者詩意泉湧。然而，(中略) 不論「詠春」，或是「春恨」、「春愁」、「春怨」，顯現在這嚴冬將盡、乍暖還寒的季節裡，特別能引起詩人的浪漫情懷，而能歌詠出曼妙的詩篇<sup>15</sup>。

(イ) 王維很少用「憐」、「戀」、「惜」、「愛」等主觀情感的詞語，他只是呈現出一幅幅單純客觀的圖畫，但他卻能畫景物成情思，使詩意、禪意透過景物而自然流溢出來<sup>16</sup>，

(ア) は吳氏の説で、春に対して詩人は喜びや楽しみの気持ちがあれば、また憂いや悲しみを抱いたりする時もあり、いずれにせよ、厳しい冬が終わり、まだ肌寒い春に当たって詩人はとりわけ感情が豊かになっているため、ロマンチックで繊細な詩を読み上げられるという指摘である。一方、(イ) は蘇氏の説で、王維は「憐れむ」や「恋しい」、または「惜しむ」、「愛」など主観的な表現より、単純で客観的な視点による絵画的なムードを狙っていたが、そうした叙景を通して、物思いや禅的な雰囲気を醸し出すことが出来るという見解である。気持ちを具体的に表現するかという点では、両氏の見解が分かれているようである。(3) 「人間の心境」で挙げた表現から、「臨觴」「惆悵」「傷我情」「愁思」「愁心」「愁見」「更傷離」など、意外に憂いの表現が多いことに驚いた。つまり、(イ) の蘇氏の見解より、(ア) の吳氏の見解の方が上記の考察の結果に相応しいことは明らかであろう。春はめでたく、喜ばしい季節であ

<sup>15</sup> 吳啟楨 著『儒林選萃 38 王維詩的意象』2008. 05 文津出版社有限公司 P212

<sup>16</sup> 蘇心一 著『王維山水詩畫美學研究』文史哲學集成 2007. 05 文史哲出版社 P182

るほか、また、それぞれの状況に触発され、さまざまな心境が読み込まれているのである。それらの心境は次の三つに分類できる。

(A)「愁心視春草」-- (雑詩)、「惆悵遠行客」-- (春中田園作)、「春風挽斷更傷離」-- (閨人春思)、「花心愁欲斷」-- (紅牡丹) など、憂いや悲しみの心境の表現がもつとも多い。春の明るさとは裏腹のようで、詩人や歌に歌われている人物は何かの気がかりで却って気持ちが沈んでしまったり、または遠い所にいる人を思い出して悲しくなったりするのである。

(B)「相歡語笑衡門前」-- (輞川別業) の句のように、近所の人々がおしゃべりを楽しんでいる一時の描写で、桃源郷と思われるほど太平極まりの長閑な心境も見られる。

(C)「閑坐但焚香」-- (春日上方即事)、「人間桂花落」「夜靜春山空」-- (鳥鳴磎) などの句のように、禅的なムードに溢れている境地の心境も王維の春に因んだ漢詩には決して珍しくない。

このように、春とはいえ、その風景に気が染まられ、思わずわくわくするものが勿論あり、または逆にそのような季節に触発され、悲しくなるのも少なくない。更に、そのような自然の変化に少しも心が動かさず、悟りの境地に達している心境もあるのである。

### (三) 漱石の題画詩—春の捉え方

前述したとおりに、漱石は晩年に南画（文人画）を画いたり、後に画に添える積りで題画詩を沢山詠んだりしている。その題画詩には春を詠嘆した作品は少なくない。それらの題画詩について、中村宏氏は「漱石の詩の中には早くから画趣に富む句が見られたが、それが最も顕著になり、しかも“胸中の画”を詠うことが主体となったのはこの時期である。」<sup>17</sup> と語り、この時期の漢詩は画趣に富んでいると高く評価している。鄭清茂氏は更に、「五言絶句是最難出色的體裁，（中略）但漱石不但敢作，而且作得好，當然我們不能否認這些詩裏有唐詩，尤其是王維的影響，然而卻有漱石自己的心境，不只是模仿而已。在這方面，漱石無疑是日本漢詩中的第一人。畫意、禪味和詩情三者融而為一，正是漱石絶句的特色。」<sup>18</sup>（一般の人がなかなか作れない五言絶句に漱石はよくぞ挑戦している。それらの漢詩には唐詩、とりわけ王維から深く影響を受けているのは否めないが、漱石は王維の模倣にとどまらず、更に画意及び禅味、そして詩情を一体に融合させた境地にまで達している。正に、日本の漢詩界において第一人者と称せられよう）と、大いに漱石を賞賛している。日本の漢詩界での第一人者と言えようかは別問題であるが、王維の模倣にとどまらないという指摘は興味深い。では、王維の模倣（取り敢えず氏の言葉をそのまま使おう）、またはそこから脱出し、漱石自身独特な部分は如何なるものであろうか、考察してみよう。

<sup>17</sup>中村宏『漱石漢詩の世界』昭和 58 年 9 月 5 日 第一書房 P171

<sup>18</sup>鄭清茂『中國文學在日本』1981. 10. 4 (1968. 10 初版)純文學出版社 P35

表二<sup>19</sup>

---

|         |         |         |         |       |                 |
|---------|---------|---------|---------|-------|-----------------|
| 莫道風塵老   | 當軒野趣新   | 竹深鶯亂轉   | 清晝臥聽春   | ----- | (94 「春日偶成」 其一)  |
| 竹密能通水   | 花高不隱春   | 風光誰是主   | 好日屬詩人   | ----- | (95 「春日偶成」 其二)  |
| 細雨看花後   | 光風靜座中   | 虛堂迎昼永   | 流水出空門   | ----- | (96 「春日偶成」 其三)  |
| 樹暗幽聽鳥   | 天明仄見花   | 春風無遠近   | 吹到野人家   | ----- | (97 「春日偶成」 其四)  |
| 抱病衡門老   | 憂時涕淚多   | 江山春意動   | 客夢落煙波   | ----- | (98 「春日偶成」 其五)  |
| 渡口春潮靜   | 扁舟半柳陰   | 漁翁眠未覺   | 山色入江深   | ----- | (99 「春日偶成」 其六)  |
| 流鶯呼夢去   | 微雨濕花來   | 昨夜春愁色   | 依稀上綠苔   | ----- | (100 「春日偶成」 其七) |
| 樹下開襟坐   | 吟懷與道新   | 落花人不識   | 啼鳥自殘春   | ----- | (101 「春日偶成」 其八) |
| 草色空階下   | 萋萋雨後青   | 孤鶯呼偶去   | 遲日滿閑庭   | ----- | (102 「春日偶成」 其九) |
| 渡盡東西水   | 三過翠柳橋   | 春風吹不斷   | 春恨幾條條   | ----- | (103 「春日偶成」 其十) |
| 雨晴天一碧   | 水暖柳西東   | 愛見衡門下   | 明明白地風   | ----- | (104 [無題])      |
| 芳菲看漸饒   | 韶景蕩詩情   | 却愧丹青技   | 春風描不成   | ----- | (105)           |
| 雲箋有響墨痕斜 | 好句誰書草底蛇 | 九十九人渾是錦 | 集將春色到吾家 | --    | (110)           |
| 山上有山路不通 | 柳陰多柳水西東 | 扁舟盡日孤村岸 | 幾度鶯群訪釣翁 | --    | (112 題自画)       |
| 獨坐聽啼鳥   | 閑門謝世嘩   | 南窓無一事   | 閑写水仙花   | ----- | (113)           |
| 野水辭花塢   | 春風入草堂   | 徂徠何澹淡   | 無我是仙鄉   | ----- | (122 閑居偶成似臨風詞兄) |

<sup>19</sup>表二に掲げているのは『漱石全集 第十八巻』(全 28 巻 1993-1999 岩波書店) の漢詩の欄に基づいて表記したものである。

十里桃花發 春溪一路通 潺湲聽欲近 家在斷橋東----- (124 題自画)

幽居人不到 獨坐覺衣寬 偶解春風意 來吹竹與蘭----- (132)

唐詩讀罷倚闌干 午院沈沈綠意寒 借問春風何處有 石前幽竹石閒蘭<sup>20</sup>-- (133)

### (1) 植物などの風景

|                  |       |                 |
|------------------|-------|-----------------|
| 「竹深」「聽春」         | ----- | (94 「春日偶成」 其一)  |
| 「竹密」「花高」         | ----- | (95 「春日偶成」 其二)  |
| 「細雨」「看花」         | ----- | (96 「春日偶成」 其三)  |
| 「見花」「春風」         | ----- | (97 「春日偶成」 其四)  |
| 「春意」             | ----- | (98 「春日偶成」 其五)  |
| 「春潮」「柳陰」         | ----- | (99 「春日偶成」 其六)  |
| 「微雨」「濕花」         | ----- | (100 「春日偶成」 其七) |
| 「落花」             | ----- | (101 「春日偶成」 其八) |
| 「草色」「萋萋」「雨後青」    | ----- | (102 「春日偶成」 其九) |
| 「翠柳」「春風」         | ----- | (103 「春日偶成」 其十) |
| 「雨晴」「柳西東」「明明白地風」 | ----- | (104 [無題])      |
| 「芳菲」「春風」         | ----- | (105)           |
| 「春色」             | ----- | (110)           |
| 「柳陰」             | ----- | (112 題自画)       |
| 「水仙花」            | ----- | (113)           |
| 「春風」             | ----- | (122 閑居偶成似臨風詞兄) |
| 「桃花」「春溪」         | ----- | (124 題自画)       |
| 「春風意」「竹與蘭」       | ----- | (132)           |
| 「綠意」「春風」「幽竹石閒蘭」  | ----- | (133)           |

上記のように、まず草、青、緑、花など春のイメージとしてポピュラーな表現がもっとも頻繁に使われていることは明らかである。それ以外に、具体的な植物と言えば、竹の次に柳が春のシンボルとして多用されている。そして、蘭の花が二回、桃の花と水仙は一回ずつ、つまり具体的な花の名が少ないことが伺える。

一方、上に挙げた春の風景の関連語彙から、興味深く感じられることがある。植物ではなく、「春風」や「春溪」、「聽春」、「春意」などのように、春という率直な表現

<sup>20</sup> 「石閒蘭」の「閒」は、『漱石全集 第十八巻』の最初の漢詩表記には「閒」となっているが、後ろの漢文下し読みの部分には「間」となっている。

の頻出である。そのうち、春風が圧倒的にその数が多いことに驚く。竹や柳、花などの植物は、視覚的な材料とすれば、春風は触覚的な対象、しかも場所は囚われずに如何なる場所でも感じられる対象と看做せる。漱石は更に、「聴春」という春を楽しむ方法を提案している。となると、触覚にとどまらず、更に春風、春のせせらぎの音、鳥の鳴き声などの聴覚にまで春の楽しみを深めることが可能になるのである。

## (2) 鳥など動物の関連

|         |       |                 |
|---------|-------|-----------------|
| 「鶯亂囀」   | ----- | (94 「春日偶成」 其一)  |
| 「聴鳥」    | ----- | (97 「春日偶成」 其四)  |
| 「流鶯呼夢去」 | ----- | (100 「春日偶成」 其七) |
| 「啼鳥自残春」 | ----- | (101 「春日偶成」 其八) |
| 「孤鶯呼偶去」 | ----- | (102 「春日偶成」 其九) |
| 「鶯群」    | ----- | (112 題自画)       |
| 「啼鳥」    | ----- | (113)           |

聴覚的な感覚による春のイメージとして、漱石も鳥の鳴き声を愛用していることは明らかであろう。しかし、通称の鳥という表現以外に、鶯という鳥の名しか登場しておらず、五種類もの鳥の名が挙がっている王維の詩に比べ、漱石の漢詩には歌われている鳥の名が限られているのも事実であろう。鳥以外の動物なら、「鶯群」しか挙げられない。鶯鳥は春の象徴と看做せるかは疑問であるが、実はこの漢詩は『図説漱石大観』図版 39 の「山上有山圖」<sup>21</sup> に掲げている題画詩であり、描かれている画は川で隔てられた奥山の春景色と見える。訪れる客もなく、伴っているのは鶯鳥しかいない程、俗世間の煩いから隔絶され、長閑な雰囲気の桃源郷みたいな境地を、漱石は一つの憧れとして歌っていると捉えられるだろう<sup>22</sup>。

## (3) 人間の心境

|         |       |                |
|---------|-------|----------------|
| 「清晝臥聴春」 | ----- | (94 「春日偶成」 其一) |
|---------|-------|----------------|

<sup>21</sup> 吉田精一『図説漱石大観』角川書店 1981. 5. 26

<sup>22</sup> その南画の境地について、安部成得氏も「漱石はこの画の場面設定に、外界から隔絶された「絶境」（「桃花源の記」に見える語）の、とある川添いの村里の岸べに「わざへ呑気な扁舟を泛べて」糸を垂れる釣翁をおいたのである。この詩はそうした南画的な世界を説明したことになろう。」とのように、一つの桃源郷と看做しているのである。（安部成得「漱石の題画詩について」『帝京大学文学部紀要 国語国文学 第 13 号』昭和 56. 10. 1 帝京大学文学部国文学科 P. 310）

|                    |       |                   |
|--------------------|-------|-------------------|
| 「好日属詩人」            | ----- | (95 「春日偶成」 其二)    |
| 「光風静座中」「虚堂迎昼永」     | ----- | (96 「春日偶成」 其三)    |
| 「吹到野人家」            | ----- | (97 「春日偶成」 其四)    |
| 「抱病衡門老 憂時涕淚多」      | ----- | (98 「春日偶成」 其五)    |
| 「扁舟半柳陰 漁翁眠未覺」      | ----- | (99 「春日偶成」 其六)    |
| 「昨夜春愁色」            | ----- | (100 「春日偶成」 其七)   |
| 「樹下開襟坐」            | ----- | (101 「春日偶成」 其八)   |
| 「遲日滿閑庭」            | ----- | (102 「春日偶成」 其九)   |
| 「春恨幾條條」            | ----- | (103 「春日偶成」 其十)   |
| 「愛見衡門下 明明白地風」      | ----- | (104 [無題]) M45. 6 |
| 「却愧丹青技 春風描不成」      | ----- | (105)             |
| 「集將春色到吾家」          | ----- | (110)             |
| 「扁舟盡日孤村岸」「幾度鷺群訪釣翁」 | ----- | (112 題自画)         |
| 「独坐聽啼鳥」            | ----- | (113)             |
| 「春風入草堂」「無我是仙郷」     | ----- | (122 閑居偶成似臨風詞兄)   |
| 「幽居人不到」「獨坐覺衣寬」     | ----- | (132)             |
| 「唐詩讀罷倚闌干」          | ----- | (133)             |

春とは、わくわくと生命に溢れ、めでたい季節で、詩人や登場人物の喜びの心境が伴うのが一般的な捉え方である。が、上掲した漱石の春に因んだ題画詩には喜びという表現は見当たらず、代わりに「憂時涕淚多」「春愁色」など、この季節には相応しくない憂いや悲しみが盛り込まれているのである。そして、もっとも目立っているのは「扁舟盡日孤村岸」<sup>23</sup>「臥聽春」「光風静座中」「独坐聽啼鳥」など、俗世間に背を向けている隠者のような詩人の姿、それによって醸し出している禅の雰囲気表現の多用である。そうした悟った内面の持ち主であるため、「好日属詩人」という句が詠われ、恐らく春という季節のみならず、詩人にとっては春は勿論のこと、他の季節でも「好日」のように楽しめるのではなからうか。

王維や陶淵明など中国の詩人の隠逸精神や文人画の世界に憧れていた漱石は、修善寺での大患後に綴った述懐「思ひ出す事など」という一文の中で、「或時、青くて丸い山を向ふに控えた、又的爍と春に照る梅を庭に植へた、又柴門も真前を流れる小河を、垣に沿ふて緩く繞らした、家を見て—無論画絹の上に—何うか生涯に一遍で好い

---

<sup>23</sup>漱石が傾倒していた江戸時代の文人画家大家多能村竹田の文人画には隠逸精神のシンボルとして舟や漁師などの画が沢山残されている。また漱石自身の南画作品にも図版 29 の「漁夫図」、30 の「樹下釣魚圖」など、隠逸精神の表現と見られる画がある。『竹田』（編者 鈴木進 1963. 6. 10 日本経済新聞社）及び『図説漱石大観』（吉田精一 1981. 5. 26 角川書店）などを参照。

から斯んな所に住んで見たいと、傍らにある友人に語った。」<sup>24</sup>と、心にある南画の風景について語った一節がある。南画（文人画）に描かれている世界は山が重なっている奥山、人気のない奥山など屋外に視点を据えるのが文人たちの共通している点であろう。そうした南画の世界に憧れていたにもかかわらず、漱石は「臥聽春」「虚堂迎昼永」「抱病衡門老」「遅日滿閑庭」「到吾家」「独坐聽啼鳥」「獨坐覺衣寬」「倚闌干」など、いずれも室内に視点を据えた句を沢山詠んでいる。これは普段都会からあまり離れなかった漱石は身の回りから取材した結果、文人画の画家たちのように、視点を容易に奥山などの屋外に据えることが出来なかった、つまり、不完全な隠遁者だった漱石の内面の反映として看做しても可能ではなかろうか。

#### （四） 結び

王維の隠遁者生活や王維の漢詩の表現に傾倒していた漱石は、自らも中国の文人に倣い、南画や題画詩を沢山創作した。特に両者の春に因んだ漢詩の数は少なくない。上記の考察で、王維のそれらの漢詩の特徴は漱石にどれほど受容されたのか、または受容されなかった部分、漱石が更に自分の味を出している部分は如何なる表現であろうかなどの点について、次のように纏められる。

- (1) 植物では普遍性の草花、柳や桃の花、蘭、竹など具体的な名を、動物においては鳥の鳴き声や鶯というポピュラーな鳥を挙げて春の雰囲気醸し出している点では、漱石が王維の影響を受けたと考えられる。
- (2) 詩人や登場人物の心境は喜びより、憂いや悲しみが起きている点でも、王維の投影があったと看做しても良からう。

とはいうものの、

- (1) 王維の春を歌う詩には、桃や梅など一般によく知られている春の象徴の植物のほか、杏、梨の花、桂花、茱萸、芙蓉など珍しい植物、更に蕈(きのこ)、菱など食用の植物も詩に織り込まれている。それに比べ、漱石の春の題画詩には植物の種類がかなり限られている。王維の漢詩における植物の豊富さは王維の写実性を物語るほか、豊かな大地に恵まれているという王維の謳歌の姿も想像できよう。一方、漱石の場合はそうした写実性に欠けているが、春風という表現の多用から、漱石は触覚の鋭さが伺えるだろう。更に「聴春」という表現を通して、漱石は風や鳥、またはせせらぎなどあらゆる音に耳を傾けようと春を楽しむことを提供してくれたのである。こうした部分は恐らく、王維など中国の詩人の模倣を超え、独創した部分といえよう。

<sup>24</sup> 「思ひ出す事など」『漱石全集 第十二巻』P427

- (2) 王維はそれらの詩に鶯、鳩、燕、鳳凰、雀など具体的な鳥の名を挙げている。これは漱石の題画詩には見られない点である。「百鳥」—すべての鳥がこの奥山に飛んできているというのは、この土地の棲みやすいことを物語っており、資源の豊かさを賞賛しているという詩人王維の満足している心理もうかがえるだろう。のみならず、王維は鶏や牛、羊など昔百姓の生活の象徴である動物を画に盛り込み、それに老人や子供の笑い声を加え、桃源郷の風景を読者の前に広げているのである。つまり、庶民の生活の匂いが王維の詩の中には読者もたっぷり楽しめるが、漱石の題画詩にはそのような日常性に欠けていると捉えられるだろう。
- (3) 王維の春の漢詩は視点を屋外に据えているのに対して、漱石の題画詩は屋外にもあるが、「臥聽春」「光風静座中」「独坐聽啼鳥」など、庵か部屋の中に身を構えている表現の多用から、室内に視点を据える傾向があると見られる。都会生活から離れられない漱石の内面として捉えられないこともなかろう。こうした内面は鄭清茂氏が「他的詩畫固然洋溢著桃花源般的太平景象，其實正是他心緒不寧的反動表現。」<sup>25</sup>（一見は桃源郷のような太平の世界に見える漱石の詩や画は、正に彼の常に葛藤している内面の現れであろう。）と指摘したとおりに、その落ち着かない内面の渴望とみなしてもよからう。

このように、発信源である王維など中国の方に主を置き、どのような部分が着信先である日本にいた漱石の方に受容されたのか、というベクトルに従って分析しておけば、従来見落とされた痕跡、或いは受容されなかった部分が少しでも浮かび上がるのではないかと思われる。

漱石の春に因んだ漢詩は題画詩の部分だけでなく、更に全体に渡って考察する必要があるが、今後の課題としたい。

---

<sup>25</sup>鄭清茂『中國文學在日本』1981. 10. 4（1968. 10 初版）純文學出版社 P36